参考図書案内

巻末の参考文献からおわかりいただけるように、欧米では、偽薬効果に関する論文が数多く発表されており、同時に、この現象を扱った書籍も少なからず出版されている。ここでは、主として、入手の容易な英文の書籍を紹介する。ただし、そのすべてが信頼性が高いわけではない。

以下の書籍のうち、文献２は、代表的な著書や論文の解説を含め、幅広い資料を簡潔に紹介しているので、入門書として最適であろう。８は、自然治癒力という観点から見た偽薬効果について執筆された著書であり、９は代替医学的な立場から編集されたアンソロジーである。10 は、事実上、アーサー・K・シャピロの既発表論文を集めた業績集で、本書収録の論文でおわかりのように、歴史的展望に優れている。11 は、ＷＨＯ主催のシンポジウムで発表された論文をまとめたものであり、６と 14 はともに、偽薬効果に関するシンポジウムをもとに編集された、より専門性の高い論文集である。また、４と５は、向精神薬の薬効を厳密に検討し、それに疑念を投げかけた、他に類例を見ない貴重な論文集と言える。なお、重要と思われる書籍には＊を付しておいた。

偽薬効果を扱った英文書籍

1. Brody, H. (1977). *Placebos and the Philosophy of Medicine: Clinical, Conceptual, and Ethical Issues*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
2. Brody, H., and Brody, D. (2000). *The Placebo Response: How You Can Release the Body's Inner Pharmacy for Better Health*. New York: Cliff Street Books.
3. Fish, J.M. (1973). *Placebo Therapy*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
4. Fisher, S., and Greenberg, R.P. (Eds).(1989). *The Limits of Biological Treatments for Psychological Distress: Comparisons with Psychotherapy and Placebo*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. ＊
5. Fisher, S., and Greenberg, R.P. (Eds.).(1997). *From Placebo to Panacea: Putting Psychiatric Drugs to the Test*. New York: John Wiley & Sons. ＊
6. Harrington, A. (Ed.).(1997). *The Placebo Effect: An Interdisciplinary Exploration*. Cambridge, MA: Harvard University Press. ＊
7. Jospe, M. (1978). *The Placebo Effect in Healing*. Lexington, MA: Lexington Books.
8. Kuby, L. (2001). *Faith and the Placebo Effect: An Argument for Self Healing*. Novato, CA:

Origin Press.
9. Peters, D. (Ed.).(2001). *Understanding the Placebo Effect in Complementary Medicine: Theory, Practice and Research*. Edinburgh: Churchill Livingstone.
10. Shapiro, A.K., and Shapiro, E. (1997). *The Powerful Placebo: From Ancient Priest to Modern Physician*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press. ＊
11. Shepherd, M., and Sartorius, N. (Eds.).(1989). *Non-Specific Aspects of Treatment*. Toronto: Hans Huber.
12. Spiro, H.M. (1986). *Doctors, Patients, and Placebos*. New Haven, CT: Yale University Press.
13. Spiro, H.[M.] (1998). *The Power of Hope: A Doctor's Perspective*. New Haven, CT: Yale University Press.
14. White, L., Tursky, B., and Schwartz, G.E. (Eds.).(1985). *Placebo: Theory, Research, and Mechanisms*. New York: Guilford Press. ＊

加えて、アメリカ国立保健研究所他の主催により、一昨年 11 月に開催された国際会議で発表された全論文が、ハーヴァード医科大学アーサー・クラインマン教授らによりまとめられ、本書と相前後して英国医師会から出版される予定になっている。

15. Kleinman, A., *et al*. (Eds.).(in press). *The Science of the Placebo*. London: British Medical Association.

書籍ではないが、ここでふれておいた方がよいと思われることがある。昨春、マスコミによる少々歪んだ報道を通じてわが国でも話題になった、デンマークのフロブヤートソンらの論文（Hróbjartsson, & Gøtzsche, 2001a）に関する論争が、有力な偽薬研究者（Ader, 2001; Brody & Weismantel, 2001; Greene, *et al.*, 2001; Kirsch & Scoboria, 2001; Wickramasekera, 2001）とフロブヤートソンら（Hróbjartsson, & Gøtzsche, 2001b）の間で行なわれている（*Advances in Mind-Body Medicine*〔註〕, 2001, vol. 17, No. 4, pp. 291-318）。その中で、偽薬研究者の側は、偽薬投与群と無治療群と

［註］ ある意味で革新的なこの心身医学雑誌は、医学図書館を含め、日本の図書館にはほとんど収蔵されていないようである。この論争をご覧になりたい方は、この雑誌の出版元（Harcourt Publishers, Ltd., PO Box 156, Avenel, NJ 07001 U.S.A; journals@harcourt.com）に問い合わされたい。なお、同論文については、後に、その掲載誌の投書欄で行なわれた小論争（*New England Journal of Medicine*, 2001, vol. 345, No. 17, pp. 1276-79）もある。

を比較するという、本来なら考えにくい研究論文を 114 報も探し出したこれらの研究者に敬意を表しつつも、その方法論的な誤りその他を的確に指摘している。偽薬効果は、医療関係者には、多かれ少なかれ経験的に知られている現象なので、このような形でその存在を否定することは難しいであろう。したがって、フロブヤートソンらの論文の存在意義は、偽薬効果の実在に対する抵抗が、一部の研究者の間で強まってきている現われという点にあるのではないかと思われる。

ところで、わが国ではごく最近まで、偽薬効果に関する文献は、医学・心理学論文を含めて、なぜか皆無に近かったが、昨年になって、まとまった書籍（広瀬，2001）がようやく刊行された。まじめな態度で書かれたこの著書は、偽薬効果の全体像をつかむうえで参考になるし、一般向けとはいえ、専門家の情報収集源としても役立つであろう。

偽薬効果を扱った邦文の書籍および論文

16. 広瀬弘忠 (2001).『プラシーボ効果　心の潜在力』朝日新聞社
17. K．A．ブラウン (1998).「意外に大きな偽薬の効能」『日経サイエンス』５月号
18. R．L．ロッシ (1999).『精神生物学（サイコバイオロジー）――心身のコミュニケーションと治療の新理論』日本教文社

最後に、ついでながらふれておくと、偽薬に相当する物質を利用した比較研究は、既に 19 世紀末にドイツ語圏で行なわれているようである。“対照物質 control-substances” を用いたその研究は、その後に行なわれた他の研究とともに、リヴァーズの著書（Rivers, 1908, pp. 18-21）に紹介されている。これは、100 年近く前の稀覯書で、入手が困難なため、もしご覧になりたい方があれば、編者にご一報くだされば当該部分のコピーをお送りすることができる。